

## 音楽、旅そして写真

車窓から見える風景、重なり合う映画のシーンのように移り変わる音楽の情景。そんな感じを即興演奏でできたらとはいつも思っている。即興演奏は演奏者たちの自然な対話なのだ。僕はメロディにもリズムにとらわれず表面的にはあえてそれを拒否するような即興演奏をしているけれど、故意にメロディやリズムを排除して演奏していることで、逆に混沌とする音の集合体がいざリズムやメロディを物語の様に感じさせてくれる事がある。ライブに来ていたお客さんから時々同じようなことを言われる時がある。そんな時、この人は僕達のやってる事を解ってくれてるんだなあとうれしく思うのだ。

僕は暇ができると、海外をぶらりと一人旅をするのが今のところの楽しみであり、個展に使用している写真のほとんどが旅行中に撮影したものである。現地に到着し空港から外に出る。目の新しい風景。空気を思いっきり吸い込む。ホテルに着いて荷物を置き街を散策する。ひとまず気持のよさそうなオープンカフェに腰を下ろす。そこで楽しそうに話す恋人達、一人でポーっとしている人、世間話でもしているのだろうか、人々がいろんな表情を見せてくれる。僕はいつも通りジントニックをオーダー。素敵な女性がそれを持って現れると僕はなんだかニヤリとしてしまう。それがいつもの僕の旅のはじまりなのだ。ゆったり動く時間、その街を横切る風が頬にあたる。心の散歩、、、やさしい時間。

ポーズをとったモデルの表情より、自然で屈託のない笑顔がいい。構図を考えて撮った風景より、その場で感じたその情景をそのまま撮影するのが好きだ。カメラは僕の五感を残すための媒体であり、写真はそれらの記憶の断片なのだ。撮影者、被写体、風景、空気、街の雑踏、街の匂い、その場の情景を写真の裏側から想像させてくれる一枚の写真。僕はそんな写真を撮りたいといつも思っている。

## 経歴

僕は1955年5月23日愛知県豊橋に生れ現在は豊川在住。1973年大学入学のために東京に転居し、ジャズ好きが高じて在学中にドラマーとしてジャズ演奏活動を始めた。主にスタンダードジャズを演奏していたが、1978年の故富樫雅彦との出会いにより非常に大きな影響を受け、フリージャズ、即興演奏をメインに演奏するようになった。この時期、富樫雅彦「アル・アラーフ」のレコーディングに参加した。1985年から長期間演奏活動を停止していたが、2002年に参加したジャムセッションがきっかけとなり同年演奏活動を再開した。2003年には自主レーベル「ART/COM RECORDS」(現在は「ART/COM DESIGN」と改名)を立ち上げ同時に初リーダーアルバム「溺愛/Blind Love」をリリースし、ジャズ専門誌「スウィングジャーナル」でも好評を得、今後期待されるインディーズレーベルとしても注目された。この数年は月1度程度のペースで加藤崇之、宅朱美 G 等で東京都内のライブハウスで演奏活動をしているが、パリ在住のトランペッター沖至との交流がきっかけとなり、パリでも年1度の即興演奏のライブを沖至、地元アーティスト達と行っている。

また、2004年には都内のカフェのオーナーから趣味でやっていた写真を気に入られ、個展を開く事を進められたのがきっかけとなり、現在まで数度同カフェにおいて個展を行っている。最近では他からも時々個展のお誘いがあるようになったのがとてもうれしく思う。音楽でも芸術でも、ある意味で観客は表現者にとって表現された作品の一部なんだ。

## 写真展 2004~2007年

「Serene Time」「Things That I know about Europe」「Memories in Monochrome」東京千駄ヶ谷 CAFE「Loop-Line」  
「Lunch time」豊橋 JAZZBAR「ADLIB」にて

## 音楽活動に於ける共演者達

富樫雅彦、沖至、原寮、アラン・シルバ、ミッシェル・ピルツ、林栄一、藤川義明、加藤崇之、宅朱美、木村純、  
是安則克、ミドリ・モトヒデ他多数

## 主要な参加アルバム

「アル・アラーフ」富樫雅彦&インプロヴィゼーションジャズオーケストラ キング K22P-6021/2(LP)  
「フォアードサスペンス」ニュージャズシンジケート  
「溺愛/Blind Love」高木幹晴 -坂本昌己 ART/COM RECORDS ACRC-001  
「DIALOG」沖至 ART/COM RECORDS ACRC-007  
「SOL」宅朱美 ART/COM RECORDS ACRC-004  
「HEX」高木幹晴 ART/COM RECORDS ACRC-003

## 生業

現在僕は電気めっき業を営むエンジニア経営者である。この数年は電子回路業界で大きな問題となっている錫めっき皮膜から自然成長するウィスカを独自で研究・開発し、その抑制方法で大きな成果を上げつつあり業界での注目度は高いとは思っている。独創的なものへの取り組みは、多少のリスクを負っても大変重要であるように思う。独創性を追う過程で過去培われてきた方法の重要性にも目が向くのだ。基礎を再認識することが、創造性に向かう階段の第一歩なのだと思う。創造性、探究心、時には自己批判も必要である。自分自身を見つめ自身を批判しより良い自分を再構築する。少しグレードアップされた自分という道具でさらに新しいものに挑戦する。そう考えてみると、なんだか音楽も芸術も技術も生き方も同じだね。一步一步階段を上って行って、その一段一段に成果を残していく。時々昔の自分を振り返ってみては今の自分を再確認する。すこしでも格が上がっている自分が発見できた時、はじめて成長したと言えるのだ。